

事例 1 単元「受け取ろう 棕鳩十さんが残したメッセージを～大造じいさんとガン～」

## 学習日記（ふり返り）を生かした指導の改善

国語 第5学年

金沢市立材木町小学校・教諭

### 1 事例の概要

本校では、めざす子ども像「自ら学ぶ子」に迫るため、15年度より一貫して授業の終末場面の「ノート」を検証し、子どもの「学力向上」と教師の「授業改善」を進めてきた。子どもの実態に基づき、教師一人一人が個人テーマを設定し研究を進めている一方で、共通に子どもの自己評価（ノートのふり返り）を積み重ねており、それを授業の手立てや学級経営に活用することで「学力向上」と「授業改善」を図っているのである。これは、「学力」を単なる「知識的な学力」と捉えるのではなく、子どもたちが「自分の学習状況を自分で点検・反省し、次の自分の目標や行動を設定し、改善、調整したりする力（＝自己評価力）」を含めて捉えているからである。「自己評価力」は子どもたちの「確かな学力」を支える大切な土台である。本事例は、学校研究にある「ノートのふり返り＝学習日記」を生かしながら、国語科でつけたい学力である「伝え合う力」を高めるため、指導の工夫改善を図ったものである。

A-1 学校研究

A-2 国語科年間指導計画（H16・17年度 高学年）

### 2 実践内容

#### （1）単元の目標

- ・作品を読み重ね、棕鳩十が作品にこめた思いを考えることを通して、登場人物の心情や場面についての描写を味わいながら読むことができる。

#### （2）指導上の工夫点

##### ① 子ども自身が、学びの「必要感」と明確な「めあて」を持つことができる単元の導入

- ・子どもたちはこれまで、作者への興味を持ち作品を読んだ経験が少ない。本単元では伝記の読み聞かせからスタートし、作者への興味を持って『大造じいさんとガン』を読めるようになっていきたいと考えた。そうすることで、他作品への広がりにつながると考えたからである。

##### ② 基礎基本を学ぶ場や学び方を習得する場、思考を深める場の設定

- ・子どもたちはよく発言するのだが、考えが積み上がりなかつたり答えが導き出せないことがある。それは話し手も聞き手も根拠となる叙述をもとに考えを話したり聞いたりすることができていないためだと考えた。そこで、根拠を明確にするためのワークシートを用いたり、少人数から多人数へと話し合いの人数を変化させ、どの子にも学び方が身につくようにした。

##### ③ 学びが生かされた実感、達成感のある単元のゴールの設定

- ・第三次で棕鳩十の他作品を重ね読みする構成にした。第二次までにつけた力を、それぞれが生かす場を設定することで、それぞれの児童についた力がより明確になると 생각たからである。自分のよさや課題、変容を知ることは、確かな自己評価力につながると考える。

##### ④ 自己評価（ノートのふり返り＝学習日記）の活用

- ・話し合いのあとに学習日記を聞き合う場を学習計画に位置づけた。そうすることで友達との学び合いが実感でき、自分や学級集団の成長、反省点が自覚できるようにと考えた。

B-1 指導上の工夫 詳細

### 3 指導の実際

第一次 <少年むくはとじゅう物語を読もう>

- ・感想交流後、学習計画を立て、単元の見通しを持つ。
- 『受け取ろう 棕鳩十さんの残したメッセージを』

①子どもたちは、伝記の主人公に興味を持ち、学習に対する意欲や見通しを持つことができた。

彦穂少年は棕鳩十さんという作家になったよ。200もの動物に関する作品を残した棕さんは私たちに何を伝えたかったのだろう。  
棕さんからのメッセージを受け取りたいな。

第二次 <大造じいさんとガンを読もう>

- ・あらすじの理解・学習問題作り
- <こだわりの学習問題を解決しよう>
- ・グループを作り考えを伝え合う。
- <大造じいさんとガンで棕さんが伝えたかったことは>
- <友だちとの話し合いで深まったことを交流しよう>

②根拠を明確にするためのワークシートを用いることで、課題に対する考え方の根拠をいくつかの叙述から考えることができた。

第三次 <他の棕鳩十作品を読もう>

- <棕さんが読者に伝えたかったメッセージは何だろう>
- <友だちとの話し合いで深まったことを交流しよう>
- ・ノートの交流をする。

③他作品を重ね読みし、二次でついた力を生かす場を設定することで、自己の変容を実感することができた。

④学習日記を交流する場では、友達との学び合いから得られる深まりを、個人だけでなく学級全体で実感することができた。

### 4 成果と課題

#### (1) 成果

##### ① 情景描写や登場人物の心情を読み取る力の向上

- ・情景描写や登場人物の心情を読み取るワークシートを工夫することで、どの子も自分の考えを支えるための根拠（叙述）を複数持つことができた。話し合いの人数を変化させたり、棕鳩十の他作品を重ね読みしたりすることで、つけた力を他の場で生かしていくことができ、力の向上を子ども自身が実感することができた。

##### ② 伝え合う力の向上

- ・前述の4点にあるような指導上の工夫を重ねていくことで、6年生になると自分たちでよりよい表現の姿、追究の姿を設定し、伝え合う力を高めていくことができた。

##### ③ 自ら学ぶ力・自己評価力の向上

- ・「必要感」のある単元の導入や、「達成感」のある単元のゴールを設定するなど、子どもとともにつけたい力を考え進めていくことで、自ら学ぶ力や自己評価力がついた。

##### ④ 文章で自分の考えを的確に表現する力の向上

- ・全校で、自分の考えを的確に書く力の育成に取り組んできた結果、平成17年度石川県基礎学力調査では、書くことの領域で高い通過率が表れた。

#### (2) 課題

- ・単元の目標にある言語能力をより具体的な姿において、明確なねらいを持ち、一人一人の言語能力が育成される授業を展開していかなければならない。

### D-1 成果と課題 詳細

### D-2 一年後の児童の姿（平和のとりでを築く）